

イマージュと抽象

——ライプニッツの感覚論と調和の思想——

池田真治

Image and Abstraction: Leibniz's Theory of Sensation and his Thought of Harmony

Shinji IKEDA

Abstract

What kind of rationality did Leibniz esteem on the level of sensation? In this essay, I will try to answer this question, from the aspect of his theory of sensation, by focusing on his idea of *image* and *abstraction*. In fact, Leibniz did not regard the role of sense perception merely as an occasion of having knowledges, for he says: “it’s by an admirable economy of the nature that we cannot have abstract thoughts which do not require any sensible things”. It means we should see behind his theory of sensation an insight into the harmony between experience and reason.

ライプニッツの合理性の考えは、哲学史において主知主義的に解されてきた。たとえば、合理性のために感性界と叡知界との種的な相違を看過し、「現象を知性化した」ものとして（カント, KrV, A 271 / B 327）。数の真理ないし算術の命題の必然的真理に関する生得説を唱えたものとして（フレーゲ）。あるいは論理主義の起源として（ラッセル、クーチュラ）。

ライプニッツにそうした傾向を読み取れることは確かである。しかし近年の研究では解釈の偏重が見直され、分野に応じて異なる段階の合理性を考えていたことが指摘されている(Breger, 2008)。ライプニッツの認識論が「内側から」抜本的に見直されるべき時である。

普遍的記号法や普遍数学、論理学などの知的理論への注目と比べ、ライプニッツの感覚論そのものがこれまであまり注目されてこなかった⁽¹⁾。そこで本論では、『人間知性新論』を中心にライプニッツの感覚論の再評価を試みる。そこでは、「イマージュ [像] *image*」と「抽象 *abstraction*」の考えに注目することで、感覚のレベルに関する合理性をライプニッツがどのように捉えていたか考察する。具体的には、幾何学的（形）など、経験されざるもののイマージュをわれわれはいかにして持つことができるのかを問う⁽²⁾。実際、ライプニッツにおいて、感覚は認識のための単なる機会にとどまらない。というのもライプニ

ッツは次のように述べているからである。

何ら感覚的なものを必要としないような抽象的思惟を私たちが持ち得ないというのは、自然の驚くべき節約の仕方である…。(NE I, 1, 5 / A VI-6, 77)

このように、ライブニッツの感覚論の基礎に、経験と理性の調和に関するある洞察が見てとられなければならない。以下はそのささやかな検討である。

1. 見えざるイマージュ

具体的に経験できないものについてのイマージュ（像）をわれわれはいかにして持つのか。ライブニッツはわれわれの魂と宇宙の秩序を論じた「テオフィルとポリドールの対話」（1679）という対話篇で、「死のイマージュ *image de la mort*」について次のように述べる。

[...] 神は、魂が夢を見ている間でも考えたり無数の事柄を思い描くようにさせ、あたかも別のある世界の内に死があったかのように感じさせることで、死のイマージュをわれわれの内に残すことを欲したのだと思われます。⁽³⁾

先の問いに対する一つの解答をこのパッサージュから伺えよう。すなわち、神がわれわれを創造する際、死をある可能的なかたちで、われわれにも想起しうるようにさせたと。たしかにわれわれは、自らが死んでいるようなある可能世界をイメージできる。それはある「シンボルの想像」（*l'imagination symbolique*）である。デュランによれば「シンボルの想像」とは、「シニフィエがまったく現前可能ではなく、記号がある感覚的事物ではなくある「意味」（*sens*）をしか指示できないとき」を言う(Durand, 2008, p. 10)。たとえば、『パイドン』における終末論はシンボルの神話である。なぜなら、そこでは人間には経験の許されない、死の向こう側を描いているからである。同じように、数学もシンボルの想像を多分に含む。なぜなら、それは感覚経験を越えた観念や性質・法則を描くからである。

「完全な図形」のイマージュもまた、実際には経験できない。ライブニッツは「物体の内には完全な図形は存在しない」（1686）と題す小論で、次のように述べている。

部分の無限への現実的分割のために、物体の内には正確で固定的な図形は存在しない。

[...] ある石の山の内に、これら石のすべてを通して越えるようなある想像的な球体を考えることができるだろう。しかし、その表面が正確に球の形をしているような、

いかなる物体も見出すことはできない。⁽⁴⁾

この考えによれば、物体の内から完全な図形を抽象することは不可能である。

図形の問題に関連し、「無限数について」(1676)という作品を見よう。数学研究で華々しい成果を挙げたパリを離れる年に書かれたこの遺稿では、後期の基本的な立場のいくつかがすでに確立される。たとえば想像力が関わる点で無限小や連続体・点・角度も同様に虚構的存在 (*Ens fictum*) であること、連続体においては全体が部分に先立つことなど⁽⁵⁾。これら主張は、後期の現実的なもの／観念的なものという存在身分の区別につながる。

「無限小について」では、現実運動は神による超越創造(すなわち隣合う瞬間への接続的創造)に由来し、連続運動の知覚はわれわれの想像力がそれを模倣することに由来するとされる⁽⁶⁾。ライプニッツはそのことを、多角形が円を模倣する例で説明する。われわれの精神は、その角の個数がある法則に従って増加するような正多角形から、究極的な多角形すなわち完全な円を想像しうる(A VI-3, 498 / LC, 89)。すなわち、「想像力の過度な使用によってabusu imaginationis」多角形から円が生じる(A VI-3, 503 / LC 98)。言い換えれば、想像力によってわれわれの有限な知覚が「補整」され、無限正多角形から円の認識が与えられる。このようにライプニッツは、有限な精神と想像力が協働して連続性が認識されると考えた。あるいは、われわれの連続性認識の実在的根拠として現実の離散的構造がある。実在と現象の相補的關係についての教説が、すでにここに導かれている⁽⁷⁾。

ライプニッツは、われわれが完全な円のイマージュを持つことを否定しない。完全な円の像は虚だが、その内に含まれる対象は真であり、精神の内にある「実在の像」として完全な円が存在することをライプニッツは認める(A VI-3, 499 / LC, 90)。

しかし、その直後でライプニッツは次のようにも述べる。

精神の内に一様性の思惟は存在するが、完全な円の像は存在しない。他方で、われわれは像に対して一様性を後から割り当てる。その一様性は、不等性を感覚したのをわれわれが忘れてしまい、後から適用したものである。(A VI-3, 499 / LC, 90)

そこでライプニッツは、像に対して一様性を適用するとき、ある時点で不等性を感覚したと意識しているのだろうか、と問う。というのも意識の所時は忘却の必要条件だからである。だが、われわれは意識していなかった。円ないし多角形をわれわれが感覚するとき、われわれはその内に一様性も非一様性も感覚していない。不等性は直接われわれを打たな

いので、何か非一様なものをその内に感覚したことをわれわれは覚えていないからである。この記憶のために、われわれはその事物に一様性の名を帰属させる。それら事物が意識によってほとんど感覚されないのではない。むしろわれわれは、自らが夢に見たことを忘れてしまうように、これら事物を忘れてしまうのである(*ibid.*)。

ここでのライプニッツの考察は一見矛盾している。というのも完全な円の存在を最初は肯定し、次には否定しているからである。また何が本当に感覚されているのかははっきりしない。しかし、ライプニッツの柔軟な合理性をここに見てとらねばならない。「实在の像」が何であるか、そして「感覚」とは何かが鍵である。それらがいずれも意味となるためには、「神の似像*imago Dei*」としての人間精神に関する教説、およびライプニッツの「感覚」概念の分析が必要であろう。そこで以下ではまず、イマージュの多義性について考察する。

2. イマージュの多義性

結局イマージュとは何なのか。ライプニッツはどうやら図形ないし形象 (*species*) が二つの側面を持つと考えている。一つは受動的側面で、われわれが外界から感覚を介して受け取る質料 (心像の素材)。もう一つは能動的側面で、われわれ自身が想像力と精神のはたらきによって内的に作り出す形相 (一様性)。すなわち、見えるイマージュと見えざるイマージュがある。いずれも心的な何かだ。図形としての完全な円は身体においては決して存在しないが、精神のどこかにその基礎となる真実在のイマージュが存在するのではないか——。1676年の時点ではライプニッツはこの問題の整合的解決にまだ悩んでいる。

イマージュの多義性の問題は、『人間知性新論』(NE, 1703-5/1765出版)において、感覚に由来する観念と知性に由来する観念の区別によって整理される。それによれば、1) 認識が感覚に起源を持つ場合、認識プロセスでいくら判明さを増していっても、混雑さが部分的に残る(NE I, 1, 11/ A VI-6, 81; cf. NE IV, 6, 7)。対して、2) 認識が知的観念に起源を持つ場合、感覚はそれと呼び起こす機会としてあるにすぎず、判明さに至る(*ibid.*, A VI-6, 81; cf. A VI-6, 74 et al.)。後者は生得観念説を導く。その根底にあるのは、感覚に依存するイマージュすなわち「心像」と、知性に生得的なイマージュすなわち「観念」の対比である。

2.1 観念と心像

ライプニッツは、観念 (*idée*) を心像 (*image*) と混同したとしてロックを批判する(NE II, 29, 13-16/ A VI-6, 261-263)。この点では、ライプニッツはデカルトの観念と心像の種差を踏襲する。その議論は、観念と心像を誤って区別しているとする経験論者による合理論批判

を逆手にとったものだ。数の観念にしか判明性を見ず、図形は混雑した観念にすぎないとするロック（フィラレート）の見解に対し、ライプニッツ（テオフィル）は図形についてもその判明な観念と単なる混雑した心像を区別すべきとする。「[テオフィル] しかし、図形の認識も数の認識も想像力（*imagination*）には依存しません。想像力はそれに役立ちはしますが」（NE II, 29, 13 / A VI-6, 261f）。それはデカルトと同じ論法による。すなわち、999角形と1000角形とは、よほど注意力を持った繊細な想像力でなければその形象的識別は不可能で、千辺形の心像は一般に持ちえない。対して知性はそれらを容易に識別する。

観念と心像の区別をより良く理解するためにも、感覚の二義性についてのライプニッツの見解を説明しておかねばならない。というのも、ライプニッツにおいて、概念（観念）と表象は互いに身分を異にするからである。可感的観念と感覚的表象の区別について、「可感的観念は形や運動の細部に依存しそれらを正確に表出しているが、私たちの感官を打つ機械的な働きかけのあまりの多さや小ささによる混雑性においてこの細部を識別する訳にはいかないこと」を彼は指摘する（NE IV, 6, 7 / A VI-6, 403）。McRae(1976)やParkinson(1982)らが説得的に論じたように、ライプニッツが可感的概念と区別される感覚的表象の条件として何らかの判明性を要求しているならば、あるものの可感的概念を持つからといって、その判明な感覚的表象を持つことにはならない。すなわち、判明に認識される感覚とその混雑した観念とは別なのだ。たとえば、個別的な色の感覚的観念は混雑した観念である。色の識別など一致・不一致の判断は、「混雑した感覚的観念に結びついた判明な観念が概念される限りでしか成功しない」（NE IV, 6, 10 / A VI-6, 405）。つまり、緑の観念は青の観念と黄色の観念に分析されるが、それ自体の観念の内において青と黄との観念をわれわれが識別できているわけではない。

同様に、感覚を微小表象と同一視できない。われわれは注目した感覚しか思惟しておらず、われわれの注意を免れる混雑した微小感覚が無数にある。たとえ注意していなくとも、それらの内のあるものは完全に消されず思惟の内に残っている（NE II, 1, 11 / A VI-6, 113）。そうした認識のギャップを、われわれは想像力で埋める。その例として、ライプニッツは「歯車」を挙げる。歯車を回すと、速い回転によって歯が消えて、代わりに想像的な連続的透明を現出させる。われわれの想像力（*fantaisie*）は継起的で間隔的な歯の現れを識別できない。前者が想像される判明な表象であるのに対し、後者が混雑した感覚的表象である。ライプニッツはこの「人工的な透明の表象」あるいは「透明の判明な概念」が、「継起的な事物が見かけの同時性において混同されることに存する表出」でしかなく、性質あるいは観念というより「感覚的幻影 *fantômes sensitifs*」と呼ぶべきと考える（NE IV, 6, 7 / A VI-6, 404）。

2.2 神の似像 *Imago Dei*

ライプニッツが観念／心像という図形のイマージュの両義性の問題に対する一定の解決を見るのは、アルノーとマルブランシュの論争を踏まえた後、たとえば「新体系」(SN, 1695) および『人間知性新論』においてである。そこでは「実在の像」は精神の内にあるその図形の観念として有意義に考えられうる。それは「図形 *figura*」というよりむしろ〈形 *forma*〉と言われるべきである。ライプニッツにおいて心像と観念は厳格に区別されたが、心像という身分では、人間の精神の内に (*in mente hominis*) 完全な円は存在しえない。他方で、われわれは記号を介して完全な円の〈形〉についての観念を持つ ($x^2+y^2=r^2$)。それは描かれた図形とは区別される、ある〈シンボリックイマージュ *image symbolique*〉である。

ライプニッツは *Imago Dei* としての人間精神、真理の基礎としての神の内なる観念の秩序という考えを、アウグスティヌスやマルブランシュから継承する。そこでは、人間精神に「神の理性の似像」あるいは「神性の似像」を見る(PNG, §14 ; Cf. DM. §§ 28 et 34)。それにしたがえば、真な観念は本来神の精神の内に (*in mente Dei*) 存在し、われわれは、その像 (*imago*) を生得的観念として精神の内に持つ。ライプニッツはしばしば神の精神のアナログア(類比)ないしミメシス(模倣)として人間精神を語る。したがって「イマージュ」とは、ここでは、人間精神と神の精神との間にある投射的対応関係を意味する。

さて、ライプニッツは「無限数について」で、感覚される像は不規則だが、われわれは精神によってそれらに規則性をあてはめ、完全な円という実在の像を得ると述べていた。こうした規則の実在性は、人間精神に依存するのではなく、究極的には神の知性に基礎を持つ(NE II, 30, 4 / A VI-6, 265 ; cf. 『弁神論』 §184)。ライプニッツによれば、人間にとっては神のみが外的直接的対象であり、観念は内的直接的対象である(NE II, 1, 1; cf. DM. §28)。

われわれの表象は、外的直接的形相的对象として神の内にある観念を持つ。けれども、これら観念の関係を含む変様 (*les modifications*) もまたわれわれの内にあり、それら関係はわれわれの内にある観念と呼ばれ得るもので、それらはわれわれの内的形相的对象である。([1715末], Robinet, 490)

たしかに、心身間の直接的因果関係を認めず神のみを直接的対象とすることで、ライプニッツの予定調和説は機会原因論と一致する。しかし、神のみが純粹現実態 (*actus purus*) として、身体を持たずにすべてを直観する。真なる観念は神の内にあるが、われわれがそれ

を神において意識的に表象するわけではない。なぜならわれわれの思惟は、ある身体、少なくとも記号というある感覚的痕跡に依存するからである。この点でマルブランシュと区別される⁽⁸⁾。われわれ人間は一般に身体という視点に依存し、本来は神の内にある真なる観念を直視できない。この点でデカルトとも区別される。ライプニッツにとって、人間精神そのものがあるイマージュなのである。

自然・形・本質など、われわれの心的態勢（disposition）によって表現される抽象的観念は、神の精神の内にある観念である。ただし神の観念を態勢とみなすのは、純粹現実態としての伝統的な神の概念に反する。他方で人間にとっての観念はある態勢、ある可能的なものである。その意味で、概念された思惟とは区別される。むしろ観念は、顕在的表象としての感覚的像とも存在身分を異にする。ライプニッツにおいては例の「表出」理論が、感覚的像と抽象的観念の関係を説明する。たとえば、ブルーレイ・ディスクの連続的再生によって流れる音楽と映像は、そのディスクに無時間的にエンコードされている情報を表出（表現）している。ジョリーは、観念の心的還元のプロジェクトがこの表出のモデルのもと循環なくいくと考える(Jolley, 1990, p. 138)。以下はその議論の要約である。マルブランシュは、観念は精神の内にはない、なぜならそれらは抽象的対象であるからだと議論する。対してライプニッツは、マルブランシュが心的なもの（思惟）と非心的なもの（観念）とのあいだの誤った二元論を措定している、と返しうるだろう。「観念とは何か」ということで、ライプニッツが理解するのは常に「観念は心の内にある何か」であり、そこから引き下がることはない(*ibid.*)。観念とは「われわれの精神の変状ないし変様である *affectiones sive modificationes mentis nostrae*」⁽⁹⁾。こう定義することで、ライプニッツは観念を心理的で移ろいゆくものとみなしているのではない。むしろ観念とは時間を通じて不変な心理的性質である。そして、形而上学的厳密には、ライプニッツにおいて（神を含む）個体的実体とその変状（*affectio*）しか実在しない。したがって、抽象的対象は実在しない。

しかし、ジョリーの議論に補足すれば、抽象的対象も、その基礎を実体とその変状に有することで、「良く基礎づけられている」。どの観念もある「実在の像」なのである。言い換えれば、われわれはその構成要素がまったく実在の反映を持たない観念を思惟できない。

以上からわれわれは、ライプニッツにおける「イマージュ」とは、広義には、ある基体の変状ないしその表出として成立する投射的存在一般のことであると分析する。

3. ライプニッツの感覚論素描

心の内にすべてがあるにも関わらず、完全な図形の観念が感覚された像から抽象されえ

ないのはなぜか。次に、イマージュと抽象の関係、したがって感覚・想像力と純粹知性の関係を問うことで、そのように主張するライプニッツの考えを明らかにしたい。

3.1 理性・想像力・感覚

実践理性の懷疑者ピアネーズと（ライプニッツの立場を代弁している）理性の擁護者エレミートとの間の対話篇で、ライプニッツは理性・想像力・感覚の関係をクリアーに述べている。「[エレミート] なぜなら理性に依拠していないような省察は恣意的な想像にすぎず、そのような想像はもっとも劣った感覚に消えゆくものだからです」⁽⁴⁰⁾。ライプニッツが一方でこのように理性をわれわれの学的認識の中心に据えていたことは疑いない。しかしそうした側面だけでなく、ライプニッツの感覚論にも注意を向けねばならない。というのも、「可能な限り純粋な精神を私たちが常に持っているからといっても、やはり私たちは感覚器官も持つ」からである(NE I, 1, 57 / A VI-6 72)。以下ではあえて主知主義的に解されてきた『人間知性新論』に、ライプニッツの感覚論を素描しよう。

必然的真理の源が知性の内にあるのに対し、事実の真理は感覚経験およびわれわれの内にある混雑した表象から引き出される(NE I, 1, 1 / A VI-6, 75)。そうした感覚的真理の規準は、現象の結合に関する整合性に求められる(NE IV, 11, 14 / A VI-6, 447)。ライプニッツは一方で、「心のすべての思惟と活動は、感覚によって与えられ得るのではなく、[...] 心自身の奥底から来る」というラディカルな生得説を主張する(NE I, 1, 1 / A VI-6, 74)。だが他方で、「外的感覚は部分的には私たちの思惟の原因である」とも言っている(*ibid.*)。ここではあくまで思惟の原因という言い方がされており、感覚と思惟が混同されているわけではない。ライプニッツ自身の立場からすれば、感覚に根拠があるとする通説も有意義である。一般的な認識説とは、スコラ、アリストテレス、経験論に共有される、「感覚に由来しないものは知性の内には何もない」という主張であった。周知のように、ライプニッツはそこに、「ただし知性そのものは別として」をつけ加える(NE II, 1, 2 / A VI-6, 111)。「感覚からは私たちに決してやって来ない観念や原理があり」、「感覚はそれらに私たちが気づく機会を与えるけれども私たちがそれらを形成するのではなく私たちの内に見出す」(A VI-6, 74)。すなわち、感覚は抽象的観念の形成には寄与しないが、その発見の契機を与える。こうしてライプニッツは、一般的な認識説に根拠を認めつつも、さらに生得的観念および精神の内に自然的に刻み込まれた真理（自然の光）が認められねばならないとする。

ライプニッツは、感覚的印象（*traces sensibles*）の要求が不可欠とする点で、アリストテレス以来の認識説に従う。アリストテレスの『魂について』によれば、われわれの理性（ヌ

ース)は表象のはたらき(パンタシアー)による(感覚的)表象像なしには決して思惟しえない(431 a 16-17; 431 b 2; 432 a 4-10)。感覚的印象として特に念頭されているのが、文字の形(figure)や音といった「記号caractères」である(A VI-6, 77)。しかるに、記号への依存は真理の探究を妨げない(A VI-6, 78)。感覚の対象である任意の記号と、それによってなされる思惟との間の結合は、何ら必然的ではなく、あくまで規約的だからだ。しかし、実践的な利便性を考慮すれば、記号と思惟との結合がまったくの恣意であるのはよろしくない。むしろ、記号の選定には自然的な理由がある。漢字が「図文字caractère figuré」として機能していることの観察から、われわれの直観に直接そのものの観念を伝えさせる「普遍的記号caractère universel」をライプニッツが構想するのも、自然の秩序に関する反省による(NE IV, 6, 2 / A VI-6, 398f)。それは言葉の代わりに図文字を用いる。「それらの図は見える事物をその特徴で表現し、見えないものはそれを伴う見えるものによって表現する」(A VI-6, 398)。ここには事物の形と質的に類似する形象的図文字と、事象の形相を代表するシンボリック図文字の区別がある。それは伝達を容易にするもので、「想像力を豊かにしたり、盲目的な度合いが少なく言辞的であることも少ない思惟をもたらすのに大いに有用である」(ibid.)。「その図文字は本当に目に語りかけることになる」、人間の恣意によらない「それ自身で意味のある図」(A VI-6, 399)とされるように、図文字とはある実在的アイコンとして機能する記号である。ライプニッツは身体的な記号と心的な観念との究極的な符合をここに見ている。

実際、「感覚的印象」の要求は、予定調和の体系の中に不可分に組み込まれている。ライプニッツは、われわれの抽象的思惟はすべて何らかの感覚的印象を必要とし、そのことは自然がそのようである現われだとする。そして、そうした感覚的印象の要求は心身間の予定調和が成り立つ条件である。「もし感覚的印象が要求されなければ、[...]心と身体との間の予定調和は決して生じないでしょう」(NE I, 1, 5 / A VI-6, 77)。つまり、魂は決して感覚の補助を奪われない。というのも魂は常に自らの身体を表出しており、その身体は周囲の作用を受けるからだ(NE II, 1, 17 / A VI-6, 117)。ライプニッツの秩序の哲学が、単なる経験の機会としてのそれにとどまらず、感覚と身体を不可欠の要素としている。

むろん、感覚にできることもあれば、できないこともある。感覚は「普遍的真理をほめかしたり、例証したり、確認したりはできる」一方、「間違いのない永続的な確実性を証明すること」はできない(NE I, 1, 5 / A VI-6, 80)。ライプニッツにとって、「必然的真理の源泉である知的観念は感覚には決して由来しない」(A VI-6, 81)。「いかなる感覚も真理の表象である」とはいえ、それはたいてい混雑である(NE I, 2, 9 / A VI-6, 94)。こうしてライプニッツは、数学などのアプリオリな概念の知得を説明するため「生得観念説」を主張する。

まとめると、ライブニッツは観念の感覚からの独立とともに（生得観念説）、両者の不可分な対応を主張する（予定調和説）。つまり、プラトンの客観的な真理を（神の精神において）保証しつつ、アリストテレス的に感覚への依存を主張する（NE II, 1, 23 et 21, 5）。

3.2 感覚と抽象

ライブニッツにしたがえば、われわれは感覚された図形から純粋に抽象するのみでは、ある幾何学的（形）の観念に至ることはできない。感覚に由来する真理は少なくとも部分的には混雑だからである（NE I, 1, 11 / A VI-6, 81）。飼い主が棒を持つとき、犬は打たれることを連想して逃げる。この動物の連結作用（consécution）すなわち習慣的・印象的な表象の結びつきとしての動物の想像力の例に見られるように、「感覚の効果というものは、前に見出したのと同じ結びつきをもう一度自然に期待するようにしかしない」（NE II, 11, 11 / A VI-6, 143 ; cf. NE Préf. / A VI-6, 51）。つまり、感覚がもたらす認識は常に特殊かつ偶然的で、ある思考に一般性と必然性をもたらすまでには決して至らない。人間の想像力に至るには、知性の補助が不可欠である。対して、動物の連結作用は、理性を模倣する想像力ないし記憶のはたらきである（M, §26）。それは必然的結合と区別される、ある盲目的結合でしかない。では、いかにしてわれわれは具体的図形から幾何学的（形）の観念に至るのか。

感覚と抽象の関係についてライブニッツは次のように述べている。「感覚を超えたところにあるものに人々を少しずつ導くために人は感覚から始める。けれども抽象的な認識に至るに際して見出されるあのいかなる困難も、生得的認識に対しては何もなさない」（NE I, 3, 8 / A VI-6, 104）。たとえば正方形の一边とその対角線が通訳不可能であると知ることができないからといって、正方形や対角線が何かも知ることができないということにはならない。ライブニッツにとって、抽象観念の知得とその形成とは互いに別問題なのである。

問題は、抽象と具体の間の「自然の秩序 l'ordre de la nature」についてのライブニッツの考えである（cf. NE I, 1, 20 / A VI-6 83f）。ここではごく概略的に扱いうるのみである。一般にわれわれの〈表象の秩序〉（すなわち〈認識の順序〉あるいは〈発見の秩序〉）では、特殊が抽象に先立つ。「具体的なものについての認識は抽象的なものについての認識より常に先にありさえます」（NE II, 12, 6 / A VI-6, 145）。そこでは現実的存在（existens）が対象だから、複雑から単純へと分析する。より特殊な真理からより一般的な真理を導く。そこには具象から抽象へ、多から一への運動がある。そこでは事実の真理たる理由律が支配している。しかし、〈自然の秩序〉がもっとも単純なものから始まらないということにはならない。〈概念の秩序〉（あるいは〈思惟の秩序〉）では、項の結合可能性に従い、単純から複雑へ

向かう。そこでは存在 (ens) ないし本質 (essentia) が対象だからである。そしてそれら可能者のうち、共可能なものどもによって現実的存在が構成される。そこには抽象から具象へ、一から多への運動がある。そこでは、理性の真理たる矛盾律ないし同一律が支配している。こうしてライプニッツは、世界（表象の秩序）とカテゴリー（概念の秩序）という互いに相補的な自然の秩序の二つのアスペクトを採ることによって、われわれの認識を説明する。それらの統一を与えるのが「予定調和説」であり、「表出」の体系にほかならない。

しかし、そうした秩序において純粹知性と想像力はそれぞれどうはたらくのか。ライプニッツはこの問題について明確さを欠く。まずはベラヴァルを参考に仮象的〔虚構的〕一性の構成における、知性と想像力のはたらきについて分析しよう (Belaval, 2005, p. 276-8)。それによれば、1) 仮象の一性を（外的性質として）想像力から引き出す現象と、2) (たとえば延長のように) 知性から仮象的一性を引き出す現象がある。1) 想像力のはたらきは物体と虹を比較することで、2) 知性のはたらきは、物体を機械や石の山、羊の群れ、魚にあふれた池、軍隊などと比較することでライプニッツは説明しようとする。物体は虹より実在的だが、それは整合性の度合いが異なるからで、両者とも現象という点で想像力の産物である。軍隊が持つ一性は、精神的な構成物でしかなく、したがって理性的存在 (entia rationis) である。感覚あるいは想像力から「抽象」という上昇の方向には知性の諸概念があり、反対に「混雑」という下降の方向には感覚や想像力の存在者たちが認識される。たとえば、ティファニーのダイヤとカルティエのダイヤは、合して「一組のダイヤ」である。しかるに、それはそれ自体として一なる存在ではないので、理性的存在でしかない(上昇)。他方でそれらを顕微鏡で見ても、現象する限りそれらは連続体という想像力の存在ないし表象であって、かえってもとの判明さは失われる (下降)。

ライプニッツの独自性もまた、抽象に関わる想像力と知性の関係に見なければならない。アリストテレス的抽象主義によれば、数学的对象は具体的存在から抽象され、数学的思考の中ではあたかも分離態として措定されるが、それ自体としては具体的存在なしには存在しえないものとみなされる。ライプニッツはその伝統を一部継承しつつも、数学的对象が単なる抽象によって得られるわけではないとする点で、その伝統から乖離する。ライプニッツにとって抽象的对象とは自然の内にはない虚構 (fiction) である。それは現勢 (acte) ではなく、単なる潜勢 (puissance) にとどまる (NE II, 1, 2)。自然は無限に豊かなので、幾何学的対象のように完全に一樣単純なものはありえない。個体の完全な概念に比べ、抽象的对象は不完全な概念である。抽象的对象は何かある基体となる物質からその質料を分離されたものであって、そこには何かしら欠けたものがあるからである。それは実体ではな

く属性であるから、自らの生成原因を欠く。想像力が精神による盲目的な結合（総合）のはたらきとするなら、抽象は知性による分離（abs-trahere）のはたらきである。ライプニッツにおいて、抽象もまた本来的にはモナドの表象の原理に服する。モナドにおいて、主体は欲求や表象の作用と不可分だからである(M, §48)。その場合、抽象はより混雑した表象からより判明な表象を引き出す精神（魂）の抽出のはたらきである。対して想像力は、多あるいは混雑な表象を形象において一なるものとして捉える精神の虚構的統一のはたらきである。抽象的对象の形成にはこの二つのはたらきが不可分に関わる。数学者や自然学者らは抽象を実践のために用いる。たしかに、注意すればするほど実践と理論は対応するだろう。しかし自然は無限であって、すべてを見渡せるのは神のみである。「無限なものどもについてわれわれが為しうることのすべては、それらを混雑した仕方でも認識することであり、少なくともそれらがそこに存在するのを判明に知ることである」(NE, Préf. / A VI-6, 57)。

想像力と知性は、それら自体によっては、ある主観的な一性をしか形成しない。つまり感覚的質と同じように、図形もまた仮象的な一性でしかない(Belaval, 2005, p. 278)。そして、連続体一般は不確定な無際限分割を含むゆえに、知性における完全な図形の存在もライプニッツは認めない(GP II, 77 et 98)。また延長や図形は、現在の状態を示す（表出する）のみで、それらの生成原因を明らかにするわけではない。対して実体は、未来や過去をも表出するもので、原因を有している(GP II, 72)。図形を伴うかぎり、混雑なところを包摂しないような感覚的質などありえない。

こうして、知性の内にありうる図形の^{イマージュ}；像は、ある実在的定義としてその可能性が示された、観念としての幾何学的〈形〉のみということになる。具体的事物からの抽象だけでは、数学的对象は得られない。そこには知性による一様性・普遍性の付加が不可欠である。したがって、ライプニッツは抽象的観念の起源を感覚ではなく知性の内に求める。

4. 感覚と調和

ライプニッツは一方で、感覚や想像力・記憶への不可欠の依存を認めることで、アリストテレスを支持する。他方で、人間の理性と動物の想像力、あるいは神の理性と人間の理性との間の^{ミメシス}；模倣関係を措定することで、プラトンを支持する(PNG, §14)。これら諸説を統合し感覚と理性の分離を乗り越えようとするのが、ライプニッツの予定調和説にほかならない。したがって、予定調和説と感覚の理論は、切っても切れない関係にある。

われわれが見てきたように、ライプニッツにおいてイマージュは多義的である。唯心論的多元論をとり、二元論的図式に抗して判明性の度合いによる認識の連続的モデルを採り

つつも、それが二元論を完全に免れないことは、心像と観念の区別に見てとれるし、〈表象の秩序〉とともに〈概念の秩序〉を認めていることにも明らかである⁽¹¹⁾。17世紀の想像力の問題は、「イマージュとパンセのデカルト的対立」に導かれそれに終始したとサルトルが喝破したように、ライプニッツもまたその問題圏に捉われている(Sartre, 1983, p.12)。ライプニッツには、ベルクソンのような中性的「イマージュ」の概念もなければ、ジェイムズのような未分化の「純粹経験」の観念もないだろう。代わりに、イマージュの多義性を説明する図式をその秩序の思想において与える。

現象を知性化したというカントの批判も、この秩序の思想において再考されるべきである。カントの批判に反し、ライプニッツの哲学は感覚を排除するものでは決してない。というのも、秩序に関する形而上学が感覚と想像力を不可欠なものとして要請しているとライプニッツはむしろ答えるからである。すなわち、一方で秩序が魂に表現のために身体を持たせ、他方で魂がなければ身体を含む諸表象は判明性を用いえないという、心身間の不可分な関係をライプニッツは要請する⁽¹²⁾。感覚と想像力は秩序を享受しそれに参与する。脳に混雑した運動がある場合、魂の持つ思惟も判明ではない(事物の秩序)。しかしながら、

魂は決して感覚の助けを奪われていない。なぜなら魂は常に自分の身体を表出しているし、この身体は無数の仕方で常に周囲のものによって影響されているから。しかし、周囲のものはしばしば混雑した表象しか与えない。(NE II, 1, 17 / A VI-6, 117)

感覚が経験の単なる契機にとどまらないことは、秩序の思想において感覚が還元不可能であることにもよる。ド・ブゾン⁽¹³⁾は感覚が原理的に還元不可能であることを次のように説明している。すなわち、感覚はその原因に関して判明な認識を与えず、それ自体は曖昧に留まる。逆に、感覚の原因の認識は音や色の感覚それ自体を与えない。たしかに感覚は、理性的認識にとっては「感覚的痕跡としての記号という」最少の価値しかないが、代わりに知的認識を与えないところの現象へのアクセスを与える(De Buzon, 1991, p. 538-9)。

5. 感覚と音楽

イマージュと抽象、感覚と調和に関するライプニッツの思想について述べてきたことを具体化するため、最後にライプニッツの音楽論における感覚の役割について触れておく⁽¹³⁾。

1712年4月17日、クリスティアン・ゴールドバッハ(1690-1764)への手紙において、ライプニッツは音楽と感覚について興味深いことを論じている。ゴールドバッハとは、後に

あの「ゴールドバッハ予想」として数学で著名になる若き数学者である。

その手紙でライブニッツは、われわれには心地よい感覚がある一方、多くの不愉快な感覚もあることを認める。たとえば音楽では、われわれは協和音に対してある美的・神秘的感覚を持つ一方、不協和音に対して不愉快な感覚を持つ。それはいかなる理由によるのか。

少なくとも、私は協和音の理由が打音の符合 (congruentia ictuum) から探求されねばならないと考えます。音楽とは、そこにおいて精神が数えることを知らない、算術の神秘的実践です。というのも、混雑した表象あるいは感覚不能な表象においては、[精神は] 判明な意識的表象によっては気づき得ないような多くの事柄をなしているからです。実際、魂がそれ自身そのことを意識しているのを知っていなければ、魂において何も生じていないと人は勘違いしてしまいます。したがって、たとえ魂が数えているという感覚を持っていなくとも、魂はこの感覚不能な計算の結果を感じるのです。すなわち、魂は、協和音から結果する和合を、不協和音から結果する不合を感じるのです。実際、感覚不能な多数の符合から和合が生じます。通常、魂にそれが意識しているところの操作をしか割り当てないことで、とんでもない計算をしてしまうのです。そこに、古代の哲学者たちによるだけでなく、デカルト主義者ほか、ロックやベールたちのような哲学者たちによる多くの誤謬が由来するのです。[傍点強調筆者] ⁽¹⁴⁾

興味深いのは、ライブニッツが、不協和音が偶然によって好まれることがしばしばあり、有用なものとして用いられるとしていることである。その説明としてライブニッツは、協和音を光、不協和音を陰とする音楽と絵画のアナロジーを用いる。それによれば、不協和音は、光という秩序における陰のようなものとして、よりいっそう [協和音の] 秩序をわれわれに気付かせるために快楽の内に介入させられるものである (*ibid.*, p. 152 et note n° 48)。

ライブニッツは、弦を半分に切断することで感覚に現われた音程が、およそ短6度と長6度に一致したというゴールドバッハの友人が実際に発見した例に即し、そのことは、 $AB : BC$ と $BC : CA$ との中間について、無理数を有理数で近似できるのと同様であるとする。

AB	BC,	CA
8,	5,	3
短 6 度	長 6 度	

それらの比は $809/500=1.618$ 、 $500/309\div 1.618$ で近似されるように、 $\sqrt{5}:=2.236$ と描けば、 $(\sqrt{5}+1)/2=1.618$ 、 $2/(\sqrt{5}-1)\div 1.6181$ となりそれらの誤差は $1/1000$ 以下となる。すなわち、その無理数の中間比 1.618 と、有利数の比 $5/3=1.667$ と $8/5=1.6$ の中間比 1.633 とでは、数学的には厳密には区別されるべきだが、感覚に依存する音楽の観点では、後者で近似されるものと考えてよいということである。ライブニッツが示している近似はやや大きすぎる嫌いがあるものの、判明な感覚と想像力によってなされるある捨象が、音楽の美的感情と関わることの一つの数学的考察をこの例は与えている。たとえばそのことは、「隠された百科全書への入門」において、次のように述べられていたこととも符合する。

われわれには、感覚を信頼しそれらの内にいかなる差異も見出さないものを同じものとして数える、また、何かそれに反する理由が存在しない限りあらゆる仮象を信じるという、ある自然的傾向性が与えられている。でなければ、われわれは決して何事をもなせないからである。⁽¹⁵⁾

われわれは冒頭で引用した「自然の驚くべき節約の仕方」を、感覚に付与されたこの自然的傾向性に見ることができる。

このように、ライブニッツは感覚がもつ自然の秩序を分析し、それが持つ表出の可能性を、あるいは学問において、あるいは芸術において、最大限に発揮させようと考えた。われわれはここに、感覚に関するライブニッツの合理性を見出すことができよう。

註

- (1) その中で、ライブニッツの感覚論に注目した先駆的業績として、Ishiguro(1972) [邦訳：石黒(2003)] は注目に値する。これに続く研究として McRae(1976), Parkinson(1982), De Buzon(1991) などがある。
- (2) 本稿校正段階で稲岡大志氏から論文「幾何学における抽象と記号—ライブニッツの幾何学の哲学の可能性—」, 『哲學』, 日本哲学会 (2010 年掲載予定) を受け取った。本論には反映できなかったが、本稿が扱った主題をライブニッツの幾何学の観点から扱っているの、こちらも合わせて参照されたい。
- (3) *Dialogue entre Théophile et Polidore* [1679 夏—秋(?)], A VI-4, 2235f.
- (4) *Dans les corps il n'y a point de figure parfait* [1686. 4 月-10 月(?)], A VI-4, 1613f.
- (5) *Numeri infiniti* [1676.4.10], A VI-3, 498, 502 / LC, 88, 96.
- (6) 超越創造 (transcreatio) 説については、拙稿、池田(2006a)を参照。
- (7) 無限小の概念および連続性の概念については、拙稿、池田(2006a, 2006b)を参照。
- (8) 2.2 節のマルブランシュとの比較は Jolley(1990)に多くを負う。ジョリーはそこで、抽象的観念は心的に還元可能なものであるとする唯名論的解釈を採用。そして、ライブニッツはマルブランシュから観念が個別的な心的出来事ではないこと (観念の対象説)、アルノーから観念が抽象の対象ではなく何か真なる存在

者であること（観念の変様説）を受け継ぐが、そうしたライプニッツの観念の理論の整合性を主張する。

(9) *Meditationes De Cognitione, Veritate, et Ideis* [1684 夏-11 月], A VI-4, 591.

(10) *Conversation du Marquis de Pianese et du Père Eméry Eremite ou dialogue de l'application qu'on doit avoir à son salut* [1679-1681(?)], A VI-4, 2273.

(11) *Definitiones : Ens, Possibile, Existens* [1687 夏-1696 末(?)], A VI-4, 867-9 / R, 108-111.

(12) *Leibniz An die Churfürsten Sophie* [1706.2.6. Hanover], GP VII, 567 et 570.

(13) ライプニッツの音楽論についての希少な研究として、Bailhache(1992)を参照せよ。

(14) Bailhache(1992), p. 152. 邦訳は仏訳に依る。

(15) *Introductio ad encyclopaediam arcanam* [1683 夏-85 春], A VI-4, 530.

文献と略号（邦訳のあるものについては参照した。ただし一部改変したものもある。）

Leibniz, G. W.

[A] *Sämtliche Schriften und Briefe*, Deutsche Akademie der Wissenschaften (Ed.), Akademie-Verlag, Darmstadt und Berlin, 1923-.

[A VI-6] *Nouveaux Essais sur l'entendement humain* [1703 夏-1705 夏](*Sämtliche Schriften und Briefe*, A VI-6, 1962).

[CG] *La caractéristique géométrique*, Texte établi, introduit et annoté par Echeverría, J., traduit, annoté et postfacé par Parmentier, M., Vrin, Paris, 1995.

[DM] *Discours de métaphysique, Sur la Liberté, le destin, la grâce de Dieu, Correspondance avec Arnauld*, Rauzy, J.-B. (éd.), Pocket, Paris, 1993. [『形而上学叙説』, 河野与一訳, 岩波文庫.]

[GP] *Die Philosophische Schriften von G.W. Leibniz*, Gerhardt, C.I. (Ed.), Berlin, Band I-VII, 1875-90.

[LC] *The Labyrinth of the Continuum : Writings on the Continuum Problem, 1672-1686*, Translated, Edited and Introduction by Arthur, R. T. W., Yale University Press, New Heaven and London, 2001.

Leibniz, G. W. (1954). *Principe de la Nature et de la Grace Fondés en Raison, Principe de la Philosophie ou Monadologie*, Robinet, A. éd., Presses Universitaires de France, Paris.

[M] *La Monadologie*, in Leibniz(1954), p. 67-127. [『单子論』, 河野与一訳, 岩波文庫, 1951.]

[NE] *Nouveaux Essais sur l'entendement humain*, Chronologie, bibliographie, introduction et notes par Brunschwig, J., GF-Flammarion, Paris, 1990. [『人間知性新論』, 米山優訳, みすず書房, 1987 年.]

[PNG] *Principe de la Nature et de la Grace Fondés en Raison*, in Leibniz(1954), p. 25-65.

[R] *Recherche générale sur l'analyse des notions et des vérités*, introduction, commentaires et notes par Rauzy, J.-B., Presses Universitaires de France, Paris, 1998.

[Robinet] Robinet, A. (1955). *Malebranche et Leibniz. Relations personnelles*, présentées avec les textes complets des auteurs et de leurs correspondants revus, corrigés et inédits, Vrin, Paris.

[SN] *Système nouveau de la nature et de la communication des substances, aussi bien que de l'union qu'il y a entre l'ame et le corps*, 1695, GP IV, 477-87.

『ライプニッツ著作集』, 全 10 巻, 下村寅太郎ほか監修, 工作舎, 1988-99 年.

アリストテレス (2001). 『魂について』, 中畑正志訳, 西洋古典叢書, 京都大学出版会.

Bailhache, P. (1992). *Leibniz et la théorie de la musique*, Klincksieck, Paris.

Belaval, Y. (2005). *Leibniz. Initiation à sa philosophie*, 6^e éd., Vrin, Paris, (2^e éd. : 1962).

Breger, H. (2008). 'The Art of Mathematical Rationality', in *Leibniz: What Kind of Rationality?*, Dascal, M. ed., Springer, 2008, ch. 8, p. 141-152.

De Buzon, F. (1991). « Réduction et irréductibilité du sensible : l'élimination du sens commun chez Leibniz », *Revue de métaphysique et de morale*, 1991, vol. 96, n° 4, p. 531-550.

Durand, G. (2008). *Imagination symbolique*, 5^e éd., PUF, Paris, (1^{re} éd. : 1964).

池田真治 (2006a). 「ライプニッツの前期哲学における連続性の問題について」, 『アルケー』, No. 14, 関西哲学会年報, p. 75-89.

——— (2006b). 「ライプニッツの無限小概念—現代の議論を中心に—」, 『哲学論叢』, 第 33 号, 京都大学哲学論叢刊行会, p. 138-149.

——— (2009). 「ライプニッツの連続性の哲学」, 京都大学博士論文, 2009 年 3 月 23 日, 未出版.

——— (preprint). 「想像と秩序—ライプニッツの想像力の理論に向けての試論—」, ライプニッツ協会創

立記念大会，於：学習院大学，2009年11月14日発表。

- Ishiguro, H. (1972). 'Leibniz and the Idea of Sensible Qualities', in S. Brown ed., *Reason and Reality: Royal Institute of Philosophy Lectures, 1971-72*, Macmillan, London, 1972. [石黒ひで(2003).「感性的性質の観念」,『ライプニッツの哲学』,第4章,岩波書店,2003,71-91頁.]
- Jolley, N. (1998). 'Leibniz: Ideas and Illuminations', *The Light of the Soul: Theories of Ideas in Leibniz, Malebranche, and Descartes*, Oxford University Press, Oxford, ch. 8, p. 132-152.
- [KrV] Kant, I. (1781/1787). *Kritik der reinen Vernunft*, Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1998. [カント,「反省概念の二義性について」,『純粹理性批判—上』,原佑訳,平凡社ライブラリー,2005.]
- McRae, R. (1976). 'Understanding and Sensibility', in *Leibniz: Perception, Apperception & Thought*, ch. 5, p. 126-145.
- Parkinson, G. H. R. (1982). 'The "Intellectualization of Appearances": Aspects of Leibniz's Theory of Sensation and Thought', in *Leibniz Critical and Interpretive Essays*, Hooker, M. ed., University of Minnesota Press, Minneapolis, 1982, p. 3-20.
- Sartre, J.-P. (1983). *L'imagination*, 9^e éd., Presses Universitaires de France, Paris (1^{re} éd. : 1936).

[CEPERC, CNRS Aix-en-Provence 客員研究員・哲学・エピステモロジー]